
研究活動報告

第14回厚生政策セミナー 「長寿革命：驚異の寿命伸長と日本社会の課題」

本研究所の主催による2009年度の厚生政策セミナーは、読売新聞社の後援により2009年12月22日(火)、東京都渋谷区にある国連大学国際会議場にて開催された。第14回となった今回のテーマは「長寿革命：驚異の寿命伸長と日本社会の課題」であり、日本をはじめ先進諸国の驚異的な寿命伸長のメカニズムと背景要因を探り、社会・経済に及ぼす影響さらには政策対応のあり方について論じることがをねらったものである。多数の来場者があり、午前10時の開会から午後4時30分の閉会まで会場は大いに盛り上がった。

午前の部は京極高宣所長の開会挨拶により始まり、本研究所の金子隆一・人口動向研究部長が「問題提起」をおこなった後、2つの基調講演がなされた。金子部長は、①長寿はどのように実現されたのか、②長寿はどのように社会を変えたのか、③寿命はこれからどのようになっていくのか、④長寿はどのように社会を変えていくのかという4点に着目して本セミナーの討論のポイントを提示した。

基調講演(1)はカリフォルニア大学バークレー校のウィルモス(John R. Wilmoth)博士による「人類の寿命伸長：過去・現在・将来」であり、歴史的な寿命の伸長とその原因、将来の寿命の限界などについて興味深い考察が述べられた。次にニューヨーク市立大学の堀内四郎教授が、基調講演(2)「日本人の寿命伸長：原因・趨勢・展望」において、日本人の長寿化の要因について、急速な経済成長、二重の疫学的転換、伝統的ライフスタイル(食事、衛生観念)、所得と富の分配などの観点から論じた。死亡率改善などのパターンを国際的に比べると、日本はまだ余力があり、将来も高齢の方に伸びる可能性があるという。

午後の部は本研究所の高橋重郷副所長の司会によるパネル・ディスカッションであり、はじめに3人のパネリストの意見発表がおこなわれた。まず、齋藤安彦・日本大学大学院総合科学研究科教授が「私たちは本当に、より健康に、長生きしているのか?：健康状態別余命研究から」と題して報告し、続いて鈴木隆雄・国立長寿医療センター研究所長が「日本の高齢者の健康問題：疾病予防から介護予防へ」と題して報告した。さらに南砂・読売新聞東京本社編集委員が本テーマに関しジャーナリストの視点から報告した。

この後、3人のパネリストに基調講演者2人が加わり、高橋副所長の司会により、ここまでの発表を踏まえて、また聴衆からの質問にも答えつつ、突っ込んだ討論がおこなわれた。パネル討論は、寿命の今後の見通し、寿命の男女差、高齢者と社会のつながり、個人のレベルにおける長寿化の課題、日本社会の課題、今後の寿命研究の課題など多岐にわたったが、国立社会保障・人口問題研究所の厚生政策セミナーで寿命(死亡力)が主題となったのは今回初めてのことであり、新鮮な議論が展開された。最後に、高橋副所長が、従来の人口研究と老年医学との研究交流・コラボレーション、健康寿命といったいわば死亡力(mortality)の一步手前の部分の研究に広げていくこと、さらには社会的な要因を加味した研究に進化させていくことの必要性を強調して、閉会した。(佐藤龍三郎記)

日本人口学会第71回九州地域部会

日本人口学会九州地域部会(代表：東博文・鹿屋体育大学准教授)の第71回部会が2010年1月30日(土)午後、長崎ウエスレヤン大学(長崎県諫早市)で開催され下記3題の報告がおこなわれた。